大人育成プロセスの崩壊

ところが近年、大人の要件を備えている大人が少なくなった。所謂（いわゆる）「大人になれない大人」が増加してきた。その主要な原因は三つ考えられる。

第一は、幼年期から是非善悪を教えない躾・教育の問題である。人の性は善であるが、それは躾・教育によって開発されるのであって、＜放任＞によって発現されるものではない。しかし、戦後日本においては＜自由＞が金科玉条の如くに持てはやされ、子供を自由に育てることが最上のこととされる観念が広まった。

本来、自由の裏返しには責任があり、その責任は秩序感覚や社会感覚を養うことから生まれる。自由と責任を併せて教えるところに本来の自由の意義が自覚されるが、自由を放任と取り違えて是非善悪を教えられないまま育ち、身体は大人であるが心は子供のままの人が多くなってしまった。放任とは動物的本能の無制限な拡張でしかなく、社会を形成して生きる人間にとっては弊害となることに留意しておかねばならない。

また、個人のあらゆる欲望を満たすことをが＜権利＞であると勘違いし、子供の動物的欲求までをも「子供の権利を尊重する」などと言って甘やかす親や教師が増えている。＜権利＞は無制限の自己主張に結びつくため、道徳が低下し、エゴイズムを肥大化させてしまう。この現象は、「家庭で何を教えなければならないか」が分からなくなっていることの現われでもあり、また、地域教育が崩壊して共同体の子育ての智恵が断絶していることを現わしている。

原因の第二は、子供の手本となるべき大人が自信を喪失したことである。「マナブ（学ぶ)」とは「マネブ（真似ぶ)」ことであり、子供は大人の後ろ姿を見て育つ。かつては、恐いものの典型として「地震・雷・火事・親父」と言われたように、大人像が明確であった。しかし、70 年前の敗戦およびＧＨＱの占領政策によって日本人の過去が全否定され、大人像までもが破壊されてしまった。

自信を失った大人社会においては、モデル像のないまま経済発展のみに邁進し、その結果、利己的に振舞う大人や責任逃れを図ろうとする大人が増え、これらが子供の目に手本として映ってしまった。その子供が大人となって次代の子供の手本となる―このような悪循環に陥っているのが今日の日本の姿である。

原因の第三は、大人と子供の境目がなくなったことである。かつては、大人と認められ、また本人もそれを自覚するためのイニシエーション（儀式）があった。一人前と周囲から認められると男は若者組に加入し、その加入儀礼が成人式であった。成人式では＜死と再生＞の儀礼である改名などが行われて自覚をもたらした。あるいは社会人としての振舞いを教える仮親をとって、新しい人間関係を作ることもあった。また、世間的には一人前として扱われたものの、若者組の中では半人前として扱われ、その中で大人としての振舞いや生活の智恵が教えられた。

しかし、科学技術の発展を背景とした人間中心主義を掲げる近代という時代は、＜進歩＞という概念に覆われている。社会は年々進歩するものと信じられているから、生活の智

恵や大人としての振舞いは軽んじられるようになった。また、ある時点における大人は社会の進歩に伴って大人ではなくなるというパラドックスに陥り、大人と子供の境目が曖昧(あいまい)となった。これらの要因が重なってイニシエーションが形骸化し、大人になるという自覚が薄れてきたのである。

今日の日本社会においては、大人になれない大人が増えている。そこからは、家庭教育、初等・中等教育における躾・教育の崩壊が窺える。これでは、大人であることを前提とした企業社会において、いくら大人の完成を目指しても糠に釘とならざるを得ない。人には各発達段階に応じた躾・教育が必要とされるが、今一度、大人になるための教育を見直す時期がきているようである。

かつての日本社会には、若者組に象徴されるような大人育成プログラムが「文化装置」として確立していた。しかし、共同体が崩壊したように見える現在では、一人ひとりが自覚して“大人”にならなければならないようになってしまった。企業は“大人”を求めるが、企業が社会に存し、社会的存在としての責任を果たさねばならないことに鑑みれば、それを企業以外に求めるのではなく、企業自体が大人を育成することも必要とされている。

大人の育成とは、新入社員に社会人のマナーを教えることのみならず、一人前となった企業人に大人の完成を求めることでもある。それが、企業の社会的責任にひとつでもあるというように捉えられないであろうか。企業という社会の中間団体が、営利追求の機能集団という側面にのみ拘泥せず、共同体としての側面を強く打ち出し、大人育成に寄与することが必要とされているのではないだろうか。